

〈実践論文〉

“イマドキ” 学生の教材観を深めるプロセス ～唱歌『虫のこえ』の教材研究を通して～

A Process to deepen the Design of Teaching Material in University Students Nowadays

– A Case Study about the Children's Song 'Mushi no Koe (The Sound of Insects)' –

関西福祉大学 阿部 真子^{*1}

要約：『虫のこえ』は文部科学省の小学校学習指導要領において2年生に指導すべき歌唱共通教材として明記されている文部省唱歌である。筆者が小学校教員を志望する学生に課したこの曲についての教材研究を通して、現代の“イマドキ”学生の教材観はインターネットなどで容易に得られる情報に作用されやすく、圧倒的に学生自身の想像力が欠如しているという特徴が見えてきた。しかし、筆者が彼らに実体験を反映しやすいキーワードを用いて問いかけることで、学生たちは教材について再度熟考した上で、自分の言葉としてアウトプットする能力を秘めていることが分かった。本研究は教員養成課程に所属する教員として、学生を指導する上で考慮すべき重要な視点を見出すための一つの実践報告である。

Key words：音楽教育 文部省唱歌『虫のこえ』教材観、虫嫌い

I はじめに（研究の動機）

筆者は2020年度まで京都市内の教育系学部で小学校教員免許取得を目指す学生を対象に「音楽演習Ⅱ＜児＞」という科目を担当していた。この科目の主な目的は文部科学省が学習指導要領で定めている小学校歌唱共通教材24曲、および楽典の知識を習得することであり、例年は筆者が各々の曲について解説を行ったのちに歌唱練習を行う形で進めていた。しかしながら、2020年前期は新型コロナウイルス感染拡大防止のため課題提示形式での授業開始となったことを受け、教材研究を一つの課題として設定した。だが、実際に提出されたものの多くは、インターネットなどで得た情報をそのまま記載したもので、学生が「自分が実際に児童に指導するとしたら」という視点が希薄である

という問題点が見いだされた。そこで筆者は、提出課題の一部に散見された「虫嫌いの児童への教育的配慮」という事項に注目し、当該学生に再度質問を投げかけることで、彼らのより深い思考を導き出そうと試みた。

なお先行研究として、子どもたちの虫嫌いについての研究は日高俊一郎（2005）¹⁾、加用・中本（2007）²⁾など、また、教員養成課程（あるいは保育士養成課程）における学生自身の虫嫌いについては木村・野崎（2016）³⁾、田川ら（2018）⁴⁾、さらに学生への教材研究課題の指導についての研究は従来から多くの研究者によってなされている⁵⁾が、本研究は、あくまで「虫嫌いの児童への教育的配慮」をキーワードとして学生の教材観が深まるプロセスを探るものである。

^{*1} Shinko ABE
Kansai University of Social Welfare

II 問題の所在

1. 教材研究課題『虫のこえ』設定の理由

前述のとおり、この教材研究の課題はコロナ禍で本来、対面で歌唱指導をすべき授業が行えなかった折に、筆者が苦肉の策として提示したものであるが、『虫のこえ』を研究課題として設定した理由は以下の3点による。

1. この曲は文部科学省の小学校学習指導要領において2年生に指導すべき歌唱共通教材として明記されている文部省唱歌であり、小学校教員を目指すものには必修の楽曲であること⁶⁾。
2. 当該学生たちは1年生後期の「音楽演習Ⅰ」において、この曲を弾き歌い課題として練習しており、ほぼ全員にとって既知の曲であるということ。
3. 虫の音が聞こえる秋の夜の情景を歌ったものであり、音楽の授業としても歌唱のみならず器楽的な活動への応用が容易であり、また他の教科との関連付けがしやすい教材であること。

2. 課題の概要

本来、教科教育法など教職に関する科目が未修の状態、今までに小学校で児童たちと触れ合った機会も数えるほどしかない2年生に、いきなり実際の授業計画に基づく教材研究を求めるのは無謀である。そのことを考慮し、課題は筆者による説明動画での形で提示し、筆者自身が「教材研究」について、具体例を挙げながらかなり細かく説明を行うことにした。以下にその概要を示す。

対象学生：「音楽演習Ⅱ＜児＞」受講生（児童教育学科児童コース2年生）

期間：2020/4/21 19:00～2020/5/1 23:59

課題の提示方法：必修の楽典プリントの補足動画の最後に、以下の内容を口頭で説明。

課題の作成方法：自由記述のレポート形式で作

成（参考資料などを明記すること）とした。

課題「自分が『虫のこえ』を教材として授業すると仮定して、授業準備・教材研究をする」

なお、筆者が「教材研究」において参考にするべき内容として例示したのは以下の項目である。ただし、課題提出にそれらのうち何項目を取り上げるかについては指定していない。

- ・『虫のこえ』は何年生の歌唱共通教材であるか。
- ・小学校の場合、その学年で習う内容以上の漢字は使えないことを留意すること。
- ・もちろん、その学年で音楽以外の教科でどのようなことを習うのかも知る必要がある。
- ・この曲の簡単な楽曲説明ができるか（調性は何調で、拍子は何分の何拍子など）
- ・歌詞を子どもたちに説明できるか。季節はいつか。
- ・例えば、出てくる虫のこえは実際にはどんな音なのか、動画を見せようと思うのなら、そのURLを挙げること。
- ・さらに自分がその教材を他の教科と連携させるとしたら、どのような連携の仕方ができるかを考えること。
- ・（他教科連携の一例として）実際、2年生の場合は理科ではなく、生活科ということになるが、外で虫を探してみるなどという理科学的な活動に結び付けることは可能である。
- ・鈴虫の音の出る原理の解説、さらにそれに近い音の作り方、マツムシっぽい音なら…などと調べてみるのも面白い。
- ・例えば、理科学的なことに結び付けてみようという人は、どういうところを探したら実際に虫がいるのかなどを調べてもよい。
- ・例えば、これを図工に結び付けて虫のこえっぽい音の出る楽器を作るための材料や作り方を調べてもよい。
- ・もしくは、音楽科で発展させて『虫のこえ』を歌うだけではなく、合奏に発展させるには、

この虫はこういう楽器で、こういうリズムで合奏するといったという楽譜を探すなり、自分で作るなり…音楽の創作活動に充てることも可能。

- ・『虫のこえ』で3時間程度の授業をすることで、1時間目は音楽の授業で普通に歌うとした場合、あとの2時間をどうするか。最終的に音楽から離れてもいいので、教材研究を通じていろんなところに自分なりの興味を膨らませて、できる限り楽しく調べること。
- ・必ずしも実際の指導計画や指導案を作成する必要はない。
- ・文字数に特に制限は設けない。自分なりに納得できるところまで調べること。

3. 提出された「教材研究」の問題点

期日に提出された課題は59人分で、その内容は曲の簡単な紹介と歌詞のみを提示した数百字程度のものから、歌詞に出てくる5種類の虫についてその生態や鳴き方（音が出る仕組み）、さらには授業に応用するときのシミュレーションや配布プリントの試作を添付したA4用紙数ページに渡る力作まで多岐に及んだ。

ここで、今回、これらの課題に見られた傾向の中から、筆者が特に気になった問題点を4つ示す。

1点目は、ほとんどの学生が課題提示時にヒントとして与えられた語句のうち、いくつかを選択してその内容をざっと調べただけにとどまり、彼ら自身の独創性が認められるところまで発展させて調べているものが非常に少なく、「内容を言葉レベルで表面的に調べただけでとどまっている」点である。

この点について一つ具体例を挙げる。「この楽曲を使って器楽合奏を行う」と明記した学生（25名）のうち、具体的な楽器名まで調べたのは10人のみであり、残りの15人の学生は「学校にある楽器の中から、虫のこえに似ている楽

器を探す」などの漠然とした記述のみで終わってしまっている。さらに、虫ごとの楽器名を挙げた10人の中でも、それぞれの楽器がどのような音なのかを実際に聴いてみたり、その正しい持ち方や鳴らし方といった奏法について調べてみたりというところまで研究を進めた学生は3人と激減してしまう。もちろん彼らの中には、それらの小打楽器についてもともと音のイメージや奏法の知識を持っているから、今さら調べて書くまでもないという学生もいるかもしれない。しかし、筆者が後日、本人に直接確認した一人の男子学生は「ウマオイ＝ギロ」と明示していたが、「ギロという楽器の存在自体をインターネットで今回初めて知った。持ち方などまでは調べていない」と回答している。

次の問題は、「子ども自身」という言葉が多用して、調べるべき内容に踏み込めていない」学生が散見される点である。例えば「子どもたちが自ら、曲に出てくる虫を図書館の昆虫図鑑で調べる」などと記述した学生の中に、実際、子どもたち自身が調べるべき事項を自ら調べた学生は皆無であった。

「子どもたち自身が決める」「子どもたち自身に調べさせる」という言葉は便利だが、教員側がその事象についての知識を持っていないければ授業は成立しない。むしろ、子どもたちがどのような結論を導き出しても対応できるよう、様々な方向に想像力を巡らせてあらゆる可能性について調べておくなど、通常の授業準備以上の知識量が必要となる。その事実気づいていない学生が多いことは憂慮すべき事態である。

そして3点目が「児童（子ども）の発達段階に応じて指導すべき課題が異なる」という「当たり前」の前提を全く考慮していない」学生が多く見られる点である。

例えば「虫のこえを模した手づくり楽器を作る」という活動を音楽と図工との連携として取り上げた学生が「楽器の作成例」として紹介し

たのは、保育士向けのホームページに掲載されている乳幼児を対象にした楽器の数々であった⁷⁾。乳幼児と小学校2年生の発達段階は全く異なっており、活動のめあてが同じであるはずはない。そのことに学生が全く疑問を抱かずに、課題にそのまま記載してしまうという事実は筆者にとって衝撃的ともいえる大きな問題であった。

以上3つの問題点は、学生たちが「教材研究」という課題に対して「その教材について様々な方向から調べ、多くの素材を集めてから授業の作り方を考える」のではなく「まずその教材でどんな授業ができるかを考えて(調べて)から、その内容を埋めていく」という順序で行われていることを意味している。つまり、教員のねらい通りに授業が進んだ時の内容しか書かれておらず、子どもたちの反応など想定外の出来事に対する想像力が圧倒的に欠如していることを示していると言える。

さらに包括的な問題として、彼らの多くが今回の課題に取り組むにあたって、インターネットなどで手軽に集められる情報を「そのまま」記載してしまっている例が多くみられることがあげられる。それは、少なからぬ数の学生がほとんど同じ内容・文言のレポートを提出していることから明らかである。もちろん、学部2年生のレポートに独創性を求めるのは難しい。しかし、彼らが記述した文言に、それが彼らの本当の気持ちを表しているのではなく、表面的な知識を並べているのではないと思われる表現がいくつか散見されたことが非常に気になった。

それらの中で筆者が最も気になったものは「虫が嫌いな(苦手な)児童に配慮し、本物の虫の動画や写真ではなく、イラストを使用する」と明記した学生が複数いたことである。少なくとも筆者が小学生だった昭和後期には小学校でこのような配慮がなされていた記憶はない。こ

れは“イマドキ”の教育現場では当たり前の認識なのであろうか。それとも、これは理科や生活科ではなく、“音楽の”授業だから起こりうる事象なのか。そもそも、この“配慮”はどういう経緯で生まれたものなのだろうか。そして、“イマドキ”の学生の多くは本当にそれが必要だと感じるのだろうか。

そこで、筆者はその事象をキーワードに据えて、再度、学生に問いかけることで、彼らの本心に少しでも迫ることができるのではないかと考え、実践することにした。

Ⅲ 「虫が嫌いな子どもへの配慮」が生まれてきた社会的背景の考察

1. 「虫が嫌いな子どもへの配慮」の一例

ここでまず、彼らが課題内で提示した「虫が嫌いな子どもへの配慮」は現代の教育現場で実際に必要とされているのかどうかの考察を行う。

ここに面白い事実がある。ある会社が「表紙の写真が子どもが気持ち悪がっている」という教師や親からのクレームなどの原因で、昆虫のアップ写真を表紙に使用したノート商品を2012年に全面生産中止しているのだ⁸⁾。これは、上述した「教育的配慮」を如実に示しているといえよう。

虫が嫌いな子どもは、以前からある一定数存在していたはずである。そこに「教育的配慮」が盛り込まれるに至った背景には何があるのか。ここでは、それらが社会的な問題となった時期と原因を、いくつかのトピックを挙げて考察する。

2. 「虫嫌い」の増加について

まず、そもそもフランツ・カフカの小説『変身』(1915)に見られるように、虫に対して何らかの生理的な嫌悪感を抱くことは、時代や地域を問わずありがちな現象であったはずである。日

本でも平安後期の『堤中納言物語』の『蟲愛づる姫君』において「よろづの虫の、恐ろしげなるを取り集めて、「これが、ならむさまを見む」とて、さまざまなる籠箱どもに入れさせたまふ。」と毛虫をかわいがる姫が変わり者として描かれている。しかし、一方で「蝶よ花よ」という言葉に表されるように一部の昆虫は「美しいもの」の代名詞として扱われてきた事実がある。また、もしも昔から虫全体を嫌悪する風潮があったならば、今回の課題である『虫のこえ』に表されているような虫の音を愛でる習慣も生まれるはずがない。やはり現代の「虫嫌い」は、古来のそれとは異なっており、虫全体を嫌悪する人口が増えていると考えるのが自然である。

このような「虫嫌い」が増えてきた要因について、近年、様々な研究者によって指摘されているが、その確固たる証明はいまだなされていない。ただ、やはり自然界において虫が減少していることがその大きな一因を担っていることは間違いないであろう。虫の減少については、2019年2月のイギリスBBC放送が伝えたように全世界的に起こっている現象である⁹⁾。一方で地球温暖化に伴い害虫が増えているという報告もある¹⁰⁾ことを考えると「虫＝好ましくないもの」という図式が多くの人々にとっての共通認識になりつつあり、「虫全体」に対する嫌悪感が増す一因となっていると考えられる。

子どもが虫を嫌いになる原因について、日高(2005)は「虫の好き嫌いは親の影響を受ける」「イメージする特定の虫が虫の好き嫌い全体に影響を及ぼす」「人は生活に侵入する虫は嫌いであり、そうでない虫は好きである」と述べている¹¹⁾。これは前述の「虫全体が減っている中で害虫が増えている」という事実と非常に密接に結びついているといえる。次章にまとめた学生へのアンケートにも「親が虫嫌いだったので」や「急に飛んで来るなど予期せぬ動きをする」などという回答があるが、それはこの日高

の論述を裏付けるものといえるであろう。なお「虫嫌い」についての研究がCiNii上で急増するのは2004年からであり、前述のノート会社へのクレームが増加した時期と一致している。

3. 保護者の要望の激化

次に「保護者等の要望の激化」の問題である。これについても様々な研究がなされている。例えば小野田正利はその著書の中で「学校における無理難題要求（イチャモン）の急増」の原因として「政治と社会の問題」「教育特有の問題」の2つに分けて説明を行っている¹²⁾。彼が「教育特有の問題」として挙げている一つの要因「少子化の問題」は保護者からの「教育的配慮の要求」と無関係ではないだろう。それに加えて、筆者は小野田が挙げている「政治と社会の問題」としての「消費者としての権利が必要以上に強調」される風潮も「教育的配慮」の大きな要因の一つではないかと考えている。

1995年のPL法、2006年の会社法、2008年の日本版SOX法など一連の法律の制定に伴い、一般社会において企業の責任が厳しく問われるようになり、社会全体でリスクマネジメントの必要性が声高に叫ばれるようになった。学校現場における保護者対応が難しくなってきたのも、ちょうど同じような時期である。前述の小野田が保護者のクレームを「無理難題要求<イチャモン>」と名付けた研究発表を始めたのが2006年、現代では当たり前に使われるようになった「モンスターペアレント」という言葉のCiNii論文検索での初出は2007年。第一次安倍内閣の下に設置された教育再生会議の第二次報告に「学校の危機管理体制の整備、学校問題解決支援チームの創設」が明記されたのが2007年。トピックをざっと概観するだけでも学校における危機管理意識が一気に高まっていることがわかる。この流れを考慮すると「教育的配慮」という名のもとに少しでもリスクのありそうな

事項を回避する風潮が表れてきたと考えるのが自然だろう。

このように概観すると、虫嫌いが増加する時期と、保護者等の要望の激化が社会問題になった時期とは見事に重なっていることがわかる。このような社会的な背景から「虫を嫌いな子どもたちのために写真ではなくイラストで対応する」という「教育的配慮」が生まれてきたと考えても不思議はないだろう。そして、今回の調査対象学生たちの多くは2000年生まれである。学校現場でのリスクマネジメントの必要性が重要視された2007年は、まさに彼らが小学校に入学した時期である。彼ら自身が意識していたかどうかは定かではないが「保護者からのクレーム対応に苦慮する小学校」を目の当たりにしてきた世代と言える。彼らが「虫の嫌いな子どもたちへの配慮」を何の疑問もなく受け入れたのは、そのような周囲の環境の影響が強く影響していると考えられる。

4. 合理的配慮と教育的配慮との混同

2016年4月の「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」施行に伴い、学校教育においても、障害のある児童生徒等の性別、年齢及び障害の状態に応じて、社会的障壁の除去の実施について、必要かつ合理的な配慮が求められることになった¹³⁾。この「合理的配慮」はあくまで障害を持つ子どもたちが他の子どもと平等に教育を受ける権利を享有・行使することを確保するために行われるものである。しかし、障害の有無に関わらず、児童の「苦手意識」や「困り感」を軽減するという行為が、「配慮」という名のもとに混同されている可能性は否定できない。

5. 教育現場に持ち込まれる市場原理

さらに挙げると、この現象には現代社会において、教育が市場原理に一部取り込まれてし

まっているという問題が関わっているのではないかと筆者は考える。教育も社会サービスの一環であるという「教育の商品化」現象は「クラスの誰もが嫌な思いをしない」ことをよしとする風潮を生み出しているのではないだろうか。章初めに挙げた昆虫ノートの件はその際たる例であるが、もう一例を挙げる。昆虫をモチーフとする子供服を販売する、あるアパレルブランドが「昆虫から生きる力を学んでもらうことや、自然の重要性を親子で再認識してもらう」ために、あえて「リアルな昆虫を使わずに、昆虫嫌いでも可愛いと思えるデザイン」を採用していることを発表している¹⁴⁾。もちろん、彼らの主張が間違っていると決めつけるわけにはいかない。しかし、そこにはあくまで「昆虫をモチーフとした商品が（その主な購買層である親世代に）売れるかどうか」という市場原理が大きく作用しており、その考え方をそのまま、実際の教育現場に持ち込んでしまうことには大きな問題があるだろう。

IV 虫の好き嫌いについてのアンケート

1. 実施理由

2章の教材研究課題を通して「虫が嫌いな児童への配慮」を必要だと考えている学生が存在が明らかになった。そこで、筆者は当該学生に新たにアンケートを取り直し、この“配慮”についての学生たちの本音を探ることにした。

なお、本論の中で使用する「虫」はいわゆる「生物分類上における昆虫」のみではなく、「蜘蛛」や「ダンゴムシ」なども含んだ「一般的に虫と言われている生物」すべてを指している。

2. 概要

対象学生：前項と同じ、「音楽演習Ⅱ＜児＞」受講生

課題の提示方法：前項と同じように、必修の動画の最後に以下の内容を口頭で説明。

回答方法:設問1～4は示された番号を選択し、
5、6については自由記述とした。

＜提示したアンケートの内容＞

1. あなたが小学校2年生の児童に『虫のこえ』の授業をするうえで、出てくる虫の説明をするとき、次のどちらを使用しますか？
① 本物の虫、あるいはその動画・写真 ② 虫のイラスト
2. 1でイラストと答えた場合、次のどちらのイラストを使用しますか？
① かわいらしくアニメふうに描かれたイラスト ② 図鑑のような精密なイラスト
3. 現在のあなたの虫に対しての感覚は、次のうちのどれに当てはまりますか？
① 好き・得意 ② 嫌い・苦手 ③ どちらでもない
4. 以前（子どものころ）のあなたの虫に対しての感覚は？
① 好き・得意だった ② 嫌い・苦手だった ③ どちらでもなかった
5. 4で「子どものころ虫が好き・得意だった」のに、「現在は嫌い・苦手」な人のうち、いつ頃「嫌い・苦手」になったか具体的に分ければ、その時期と理由を書いて下さい。
6. 設問1で写真またはイラストを使用すべきだと考えた理由を300字以上で述べて下さい。

3. 結果

アンケートに答えた学生は55人。その結果は次のとおりである。

- ① 授業で虫の説明に使う媒体について (fig. 1)
7割以上の学生がイラストではなく本物の虫あるいは動画や写真を使用すべきであると考えているが、3割近い学生がイラストを使用すべきと答えている。さらに細かく言えば、全回答者の40%に当たる22人が、写真や動画ではなく本物の虫が最良（無理ならば動画や写真）と

考えている。

ここで、本物（動画・写真）を使用すべきと回答した学生が挙げている理由をまとめておく。

なお、学生は「本物の生きている虫」も「本物の虫を使った動画や写真」も「本物」として解答している場合がある。そのため、本論ではこれより先は、文脈に応じて「生きている虫」＝「本物」、「本物の虫を使った動画や写真」＝「ホンモノ」と表記することにする。

【本物の虫・動画や写真を使用すべき理由】

- ・イラストでは本当の色・形・質感や、昆虫の体のつくりが正しく理解できない。
- ・普段、身の回りにいる“虫”（この場合、蟻や蚊・ゴキブリといった“昆虫”だけでなく、蜘蛛やダンゴムシも含める）に比べて、曲中に出てくる虫は探さないと見つからない虫なので、授業で正しい画像等を示さないと正しい知識が得られない。
- ・自分自身が虫嫌いでも知識がなかったため、これらの虫の区別がわからなかった。（黒い小さな虫が全部ゴキブリのように見えてしまうので、しっかりわかるためにもホンモノを見るべき）
- ・自分自身が「よく知らないから」「得体がしれないから」という漠然とした理由で「虫が嫌い・苦手」と思っていたが、今回調べてみると意外と（見た目が）大丈夫な虫や、格好いいと思う虫がいた。子どもたちにはしっかり実物を見てほしい。
- ・自分自身の経験上、自分で実物を育てたり、調べたりしたものの方が印象に残っている。
- ・子どもたちが「虫を好きか嫌い」は別として、生き物である虫との共存は避けられないものだ。慣れておく必要がある。
- ・子どもたちが好奇心をもって深く学べるチャンスを「苦手かもしれないから」という先入

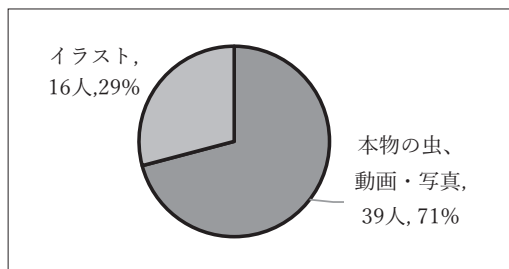


fig.1 授業で虫の説明に使う媒体

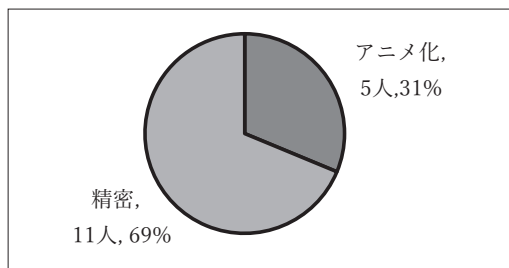


fig.2 イラストを使う場合

観で奪ってしまうのはよくないし、もったいないと思う。

【本物の虫が最良だとする学生の意見】

- ・飛ぶ・鳴くという行動が伴うことで、虫が生き物であるという感覚、人間が虫と共存しているという理解に結びつく。

【本物の虫ではなく写真や動画を使用するほうがよいと答えた学生の意見】

- ・音の出る原理を説明するには写真や説明動画などを使ったほうが分かりやすい。
- ・タイミングよく鳴いてくれるわけではない。
- ・虫が予想外の動きをした場合、自分自身が虫嫌いなので捕まえられず、クラスがパニックになる可能性がある。
- ・写真だと動き出さないという安心感で、虫が苦手な子どもたちでも見ることができる。

② イラストを使う場合 (fig.2)

次に、イラストを使用すべきと回答した学生について、そのおよそ7割の学生が精密なイラストを使用すると答えているのに対し、アニメ的なかわいらしいイラストを支持した学生は5

人で、全アンケート対象者のおよそ1割を占めている。

ここで、イラストを使用すべきと回答した学生が挙げている理由をまとめておく。

【イラストを使用する理由】

- ・本物の虫や動画・写真を見せると苦手意識が強まる恐れがある。
- ・ただの虫嫌いではなく恐怖症かもしれない。
- ・それで理科や生物が嫌いにならないように。
- ・苦手意識を持つと学習意欲が低下するかも。
- ・嫌いな子の気持ちが安らぎ、音楽の授業に集中できる。理科とは目的が違うので。

【精密なイラストを使用する理由】

- ・アニメのイラストでは特徴がつかみにくく、虫の区別がつかない。
- ・かわいいイラストでは、あまりにイメージが違いすぎて、ホンモノを見た時にそのギャップでますます嫌になりそう。

【アニメふうなイラストを使用する理由】

- ・かわいいイラストで親近感を得てくれればいい。
- ・まずはアニメふうなイラストでイメージをもって、興味がわけば徐々に写真などを見せる。
- ・表情があるイラストのほうが、自分と同じ生き物だという意識が持てる。

③ 学生自身の虫に対する好き嫌い、そしてその変化について

現在、虫が「得意・好き」と答えた学生は全体の20%にすぎず、64%の学生が「苦手・嫌い」と回答している (fig.3)。ここで興味深いのは、子どものころからずっと嫌いだった学生は逆に全体の20%にすぎず、8割の学生は子どものころにはそれほど虫に嫌悪感を抱いていなかったばかりか、過半数の学生が「虫を得意・好きだった」と回答していることである (fig.4)。

現在と過去とで虫に対する感情に変化があっ

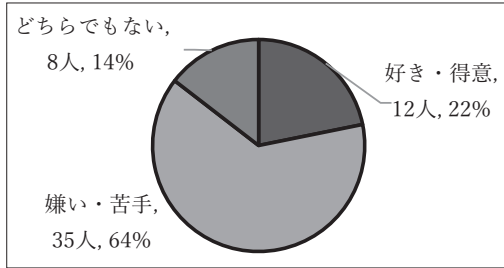


fig.3 現在、虫が好きですか？

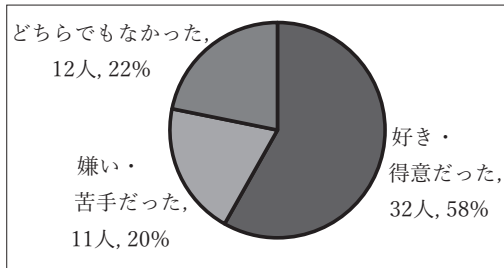


fig.4. 以前（子どものころ）虫が好きでしたか？

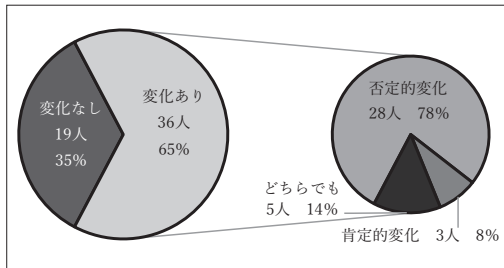


fig.5 現在と過去の比較

たのは、全体の65%に相当する36人であり、そのうち78%にも及ぶ28人が「好き」あるいは「どちらでもない」から「嫌い」という否定的な変化をしている。次に多かったのは「好き」あるいは「嫌い」から「どちらでもない」に変化した5人であるが、これは成長して虫に興味なくなったととらえるのが妥当であろう。興味深いのは「嫌い」あるいは「どちらでもない」から「好き」に肯定的な変化をした学生が3人もいることである。特に「嫌い」から「好き」に変化した1人の女子学生は「昔はなんだか怖かったのだけれど、よく見ると虫の洗練されたデザインがかっこいいと思うようになった」と回答した（fig.5）。

では、好きだった虫を嫌いになるのはいつ頃、

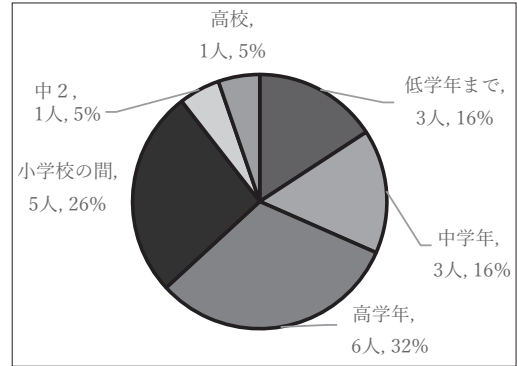


fig.6 虫が嫌い・苦手になった時期

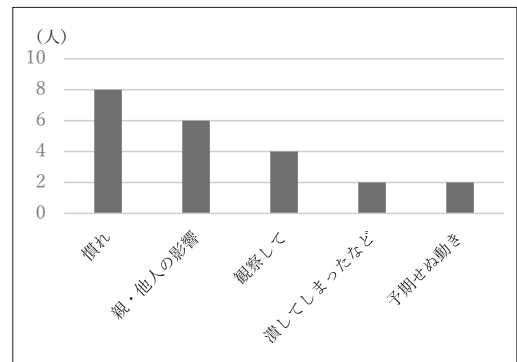


fig.7 虫を嫌いになった理由

どんな理由によるものなのか。前項の否定的な変化をした28人の学生のうち、嫌いになった時期がだいたいわかっているものは19人。その内訳をfig.6で示す。

これによると、ほぼ9割の学生が小学生の間に虫を嫌いになっている。最も多かったのは小学校5年生（3人）であった。「いつ嫌いになったかは覚えていないが、低学年のころまでは蟬を捕まえて虫かごをもって走り回っていた。」という回答もあり、小学校中学年から高学年にかけて虫に対する意識が変化している学生が最も多かった。

さらに、嫌いになった理由について尋ねた結果が次のグラフである（fig.7）。1位（8人）の「慣れ」は「虫取りなどで遊ばなくなったら、いつの間にか触れなくなっていた」や「高校で通学が自動車での送迎になったあたりから気持ち悪いと思うようになった」など、虫との「物理的

な距離」が原因とみられるものである。次に多かったのは「親が虫嫌いであらへて家に帰ると怒られた」「親が虫を見て叫んでいたり、虫を触った後は手を洗われていたりしたので、虫は汚いものだというイメージが付いたのかも」「テレビで芸能人がタランチュラを怖がっている様子を見て、蜘蛛が怖くなった」「幼稚園の時、肩に毛虫が落ちて、痛くて泣いている友だちを見たから」など「他の人の影響」を挙げた6人。そして「小3の理科でアゲハチョウを育てて気持ち悪くなった」「トノサマバッタを近くで観察して」「給食前の虫の観察で給食が食べられなかった」などの「観察がきっかけ」という4人、「ダンゴムシの赤ちゃんを知らずに潰してしまった。自分の手のひらで生命が消されたことへの恐怖を感じた」「小6の時に幼稚園の子が虫を潰しているのを見て」という「死んでしまった虫への恐怖」(2人)、「急に飛んで来るなど予期せぬ動きをするのでびっくりする(遠くに止まっている虫は平気)」(2人)などの理由が挙げられた。

④ 学生自身の「虫の好き嫌い」と授業で使用する素材の選択の相関関係

では、学生自身の「虫の好き嫌い」は前項の「授業で使用する素材の選択」と何らかの関係性があるのだろうか。

次に示したグラフは、「現在の虫の好き嫌い」ごとに、選択素材の割合の違いを示したものである。それぞれのグラフには、彼らの「以前の虫の好き嫌い」の割合も同時に示してある(fig.8～10)。

これを見ると、やはり現在「虫が好き」あるいは「どちらでもない」と答えた学生は「本物の虫(動画・写真)」を選択する割合が多いことがわかる。なお、「虫が好き」グループで唯一の「イラストを使用する」と回答した学生理由は「虫の鳴く原理をわかりやすく説明する

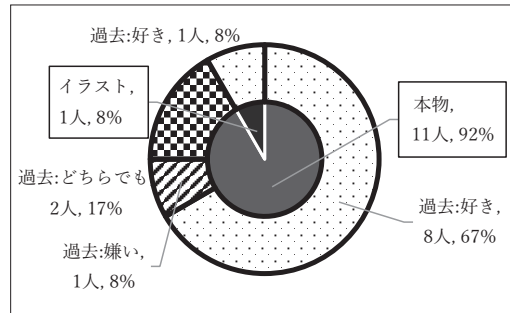


fig. 8 現在、虫が好きな学生の素材選択

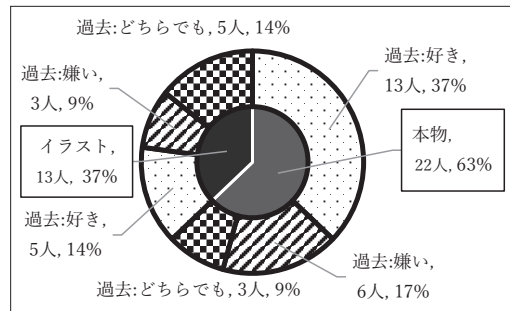


fig. 9 現在虫が嫌いな学生の素材選択

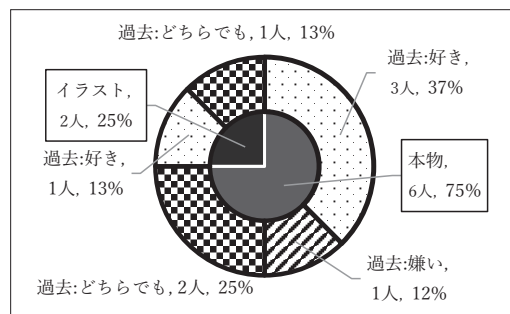


fig.10 現在、虫について「どちらでもない」学生の素材選択

ために虫の内部や断面図を見せるため」であり、虫が嫌いな子どもへの配慮とは考えにくい。

やはり、自身が「虫が嫌い」と答えた学生ほど、授業でホンモノの虫素材を使用することに抵抗を感じていることは自明である。しかし、ここで興味深いのは、現在「虫が嫌い」と答えている学生も6割を超える者が「本物の虫(動画・写真)」を選択しており、その中でも、過去は「虫が好きだった」あるいは「嫌いだった」学生のはほぼ7割が「本物の虫(動画・写真)」と答えている点である。彼らの自由記述に見られ

る「ホンモノを見せるべき」理由の多くが「自分はよく考えるとこれといった理由もなく虫を嫌いになってしまったが、『虫のこえ』を歌う2年生のころは平気だったはずなので」や「先生の言葉かけや授業の進め方によって、恐怖心や嫌悪感を持たずに虫の写真を見られるかもしれない」、あるいは「この曲をきっかけに虫に興味を持てるかもしれない子どももいるはずなので」などである。確かに、前項の「虫を嫌いになった時期」の調査で小学校2年生時点では虫嫌いではなかった学生が大半であることを考慮すると、彼らの感覚はある程度、的確だと言えよう。

このようにアンケートの結果を概観したところ、多くの学生が自身の虫に対する感情とは関係なく「ホンモノの虫」を使うことに肯定的であることが分かった。また、かわいらしいイラストを使用すると答えた学生も「まずはイラストで慣れたら写真等を使用する」などと段階的によりホンモノへ指導を進めていくことを想定していることを考慮すると、ほとんどすべての学生が「いずれはホンモノの虫を使って指導することが必要」という思考を持っているといえるだろう。

V 終わりに

ここまで学部2年生の教材研究課題をもとに、彼らの教材観を探り、さらに追加のアンケートを実践することで彼らの思考がどのように変化するかを見てきた。

実は、筆者は初め、1回目の教材研究の結果から、「音楽の授業なのだから、虫については詳しく知らなくても、子どもたちが楽しく活動できれば構わない」と回答する学生が多いのではないかと予想していた。しかし実際の結果は前述のとおり「ホンモノを知るべき」という学生が圧倒的に多く、さらには児童に相対する際の具体的なイメージを持ち、そのイメージに合

うように自分なりに複数の指導パターンを考えることができた学生が多かったのが印象的であった。これは、2章の「教材研究」の問題点として挙げた「子どもの実際の姿を想像できていない」表面的な解答よりも、内容が深まっていることを意味している。

ではこの変化はどこから生まれたのだろうか。何人かの学生にその理由を聞くと、「教材研究の時はあまり深く考えていなかったけど、先生から言われて、自分が2年生の時を思い出した」や「そういえば、クラスに虫が嫌いな子がいたな。その時、担任の先生どうしてたかなって想像した」などという答えが返ってきた。初めの「教材研究」というあまりに広いテーマから「小学2年生にホンモノの虫を見せるかどうか」というテーマに範囲が狭まったことで、具体的なイメージを想起しやすくなったのであろう。そして、さらに別の意見として挙げたのが、ちょうど同時期の2年生前期に「生活科概論」の授業で「虫を捕まえる」などの課題を並行して行っていたために「(音楽演習の課題と、生活科概論の課題で)実際に虫に触れる機会が多くて、初めはすごく嫌だと思っていたけれど、だんだん嫌悪感が薄れてきた」というものであった。自分たちが実際に虫の画像等を使って研究をした体験が「子どもたちも(自分たちと同じように)初めはちょっと嫌でも、面白く感じるようになってくれるかもしれない」「虫が嫌いってこういう感じか…じゃあ、初めにイラストも用意しておいて、まずは本物の虫(あるいは動画・写真)を見せてそれでどうしても無理なら、その時は個別対応をするなど、工夫すれば子どもたちに対処できるな」などと彼らの想像力を働きやすくしたと考えられる。

研究当初、彼らの教材研究に見えてきたのは「表面的に課題をこなしてしまう」2年生の姿と、彼らの「圧倒的な想像力の乏しさ」であった。しかし、その後の筆者と学生のやり取りや、追

加で行ったアンケートの結果を通して、彼らが持っている「物事を深く考える姿勢の一部」を垣間見ることができた。

このことから推察できることは、“イマドキ”の学生には多くの「生の体験」が不可欠であり、その体験をゆっくりと熟考し、自分の言葉としてアウトプットする場が与えられ、さらに、そこに的確なアドバイスを受けられる環境が伴えば、深い思考力や想像力といった、各々の学生が持つ潜在的な能力を引き出すことが可能なのではないかということである。

もちろん上に述べたことは、今は筆者の推察の域を出ない。学生の能力を最大限に引き出すための教員側の働きかけについては、まだまだ実践的な試みが必要となろう。

【引用文献・参考文献】

- 1) 日高 俊一郎 (2005)「虫嫌いの構造仮説」日本科学教育学会研究会研究報告 20 (4), p.73-78
- 2) 加用 文男・中本 奈穂美 (2007)「虫を気持ち悪がる感情についての発達の検討」心理科学 27 (2), 59-62
- 3) 木村 紗帆・野崎 健太郎 (2016)「保育者および教員養成課程の女子大学生が虫に抱く意識：虫嫌いの仕組み」椋山女学園大学教育学部紀要 9, 109-119, 2016
- 4) 田川 一希・新井 しのぶ・石田 靖弘 (2018)「保育の領域「環境」において、保育者の「虫嫌い」を緩和し、身近な昆虫を保育に活用する方法：保育者・教員志望の学生の昆虫に対する認識調査と昆虫観察会の実践を通して」中村学園大学発達支援センター研究紀要 (9), 67-76, 2018-02
- 5) 例えば音楽科の教材研究については、古くは木本 治子 (1969)「音楽教科教育法・音楽教材研究について - 受講学生の現状考察にもとづいて -」大阪教育大学教育研究所報 (4), 13-19, 1969-03-31 など多数存在する
- 6) 文部科学省 (2019) 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 第 6 節「音楽」p.118
https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf
(最終閲覧日 2021 年 8 月 4 日)
- 7) 保育や子育てが広がる“遊び”と“学び”のプラットフォーム [ほいくる]
<https://hoiclue.jp/tag/%E6%A5%BD%E5%99%A8>
(最終閲覧日 2021 年 8 月 4 日)
- 8) 「ジャポニカ学習帳に「昆虫」が戻ってきた！… 50 周年記念シリーズ発売へ 開発担当者に復活の裏側を聞いた」Yahoo! JAPAN ニュース 2020 年 8 月 24 日
<https://news.yahoo.co.jp/articles/e1e53ed7b4e4071b98afba3b75ee8de5cc95d71f> (最終閲覧日 2020 年 9 月 20 日)
- 9) “Global insect decline may see ‘plague of pests’”
BBC News Online 2019 年 2 月 11 日
<https://www.bbc.com/news/science-environment-47198576> (最終閲覧日 2021 年 8 月 16 日)
- 10) Yamamura, K., M. Yokozawa, M. Nishimori, Y. Ueda, and T. Yokosuka. 2006. How to analyze long-term insect population dynamics under climate change: 50-year data of three insect pests in paddy fields. Population Ecology 48: 31-48.
- 11) 前掲
- 12) 小野田 正利「教職の困難：学校における無理難題要求（イチャモン）の急増」（園山大祐，ジャン＝フランソワ・サブレ編著（2009）「日仏比較変容する社会と教育」第 3 部，pp.194-205 明石書店）
- 13) 文部科学省の答申に「合理的配慮について」の資料が初出するのは 2010 年。
文部科学省 特別支援教育の在り方に関する特別委員会（第 3 回）資料 3：合理的配慮について 平成 22 年 9 月 6 日
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1297380.htm (最終閲覧日 2021 年 8 月 30 日)
- 14) 「リアルな昆虫のイメージを使わない理由」インセクトコレクション (知育記事) 2020 年 5 月 20 日

<https://insect.market/blog/media/for-hating-insects/>（最終閲覧日 2021 年 8 月 30 日）

（令和 3（2021）年 11 月 11 日受理）

Abstract

A Process to deepen the Design of Teaching Material
in University Students Nowadays
– A Case Study about the Children’s Song ‘Mushi no Koe (The Sound of Insects)’–

Kansai University of Social Welfare Shinko ABE

Mushi no Koe (The Sound of Insects) is a Japanese Ministry of Education song that is specified in the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology’s Guidelines for the Course of Study for Elementary School as a common teaching material for singing to be taught to second graders. Through this research on teaching materials for this song to students who wish to become elementary school teachers, I have found that today’s “modern” students’ view of teaching materials is easily influenced by information easily available on the Internet, etc., and that they overwhelmingly lack their own imagination. However, by asking them with keywords that better reflect their experiences, I found that students have the ability to rethink the material and then output it as their own words. This study is a practical report to find out the important viewpoints to consider when teaching students as teachers who train teachers in universities.

Key words : Music Education, Songs authorized by the Ministry of Education
‘Mushi no Koe (The Sound of Insects)’, Design of Teaching Material,
Entomophobia